

[外国語]

外国語活動における評価の工夫

- Can-do評価シートを活用して -

湯澤 卓*

1 研究の背景

平成20年度に小学校指導要領が改定され、平成23年度より本格実施になった。この改定で、小学校に新しく外国語活動が導入された。小学校では現在、週1時間、年間35時間の外国語活動を行っており、原則として英語を取り扱っている。

小学校外国語活動新設の趣旨の一つとして、中央教育審議会（以下、中教審）は「小学校段階における英語活動については、（中略）教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点から、国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要である」「この場合、目標や内容を各学校で定める総合的な時間とは趣旨・性格が異なることとなる。また、（中略）教科のような数値による評価にはなじまないものと考えられる。これらのことから、総合的学習の時間とは別に高学年において一定の授業時数（年間35単位時間、週1コマ相当）を確保する一方、教科とは位置付けられないことが適当と考えられる。」と答申した。これを受けて、実施にあたっては「過度に文字を取得させることや、簡単な定型対話を過度に暗記させ演じることなどを目的にしたものを活用することは、外国語活動の目的にそぐわない」とし、外国語活動に初めて触れる児童が意欲を失わないように、細かい表現を習得させるよりも、コミュニケーション能力の素地を養うことに重点を置き、活動を設定している。評価については国立教育政策研究所が「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気付き」の3観点で評価することを打ち出し、日々の学習、および指導要録への評価記入はこの3観点で行われている。

しかし、小学校外国語活動は、中教審の答申にあったように、数値による評価がなじまないといえる状況なのだろうか。筆者の現在の勤務校では、児童は、1～4年生の時に年に6～10回の英語活動、国際理解教育（ALT訪問）を行っている。そのため、5、6年生の外国語活動では、あいさつ、自己紹介などの簡単な表現は、上手に話せなかったり聞き取れなかったりするものはあっても、全く分からないわけではない。ある単元では、“What _____ do you like?” を用いて単元を構成し授業を行ったが、ほとんどの児童が、“What _____ do you like?” をしっかりと使って疑問文を話し、“I like _____.” と英語で答えることができていた。これは、既習事項がしっかりと身に付き、言語によるコミュニケーションが行われていたことになろう。こういった内容を、文章ではなく評価できないものであろうか。そして、より児童の実態に合った単元構成、授業構成をすることはできないのであろうか。

2 研究の目的

本研究の目的は、外国語教育の分野で近年注目されているCan-Do評価を用いて、記述式とは違った評価の蓄積が可能であるかどうかを明らかにすることである。

3 研究の方法

- (1) 実施期間：2012年4月～7月
- (2) 参加者：6年生29名
- (3) 指導体制：学級担任の単独による授業とALTとのTTのコンビネーション
- (4) 対象単元

勤務校では、昨年度まで妙高市の指定を受けて「外国語活動モデルカリキュラム」を作成していた。カリキュラムの作成にあたっては「英語ノートⅠ、Ⅱ」「Hi, friends!」「Englipedia」「Junior Columbus」を参考にした。その中の2単元

* 妙高市立新井小学校

で従来の評価方法とCan-do評価を行った。比較対象は、授業構成、取り扱い時間、表現、語彙の数にそれほど差がないものを選択した。

表1 研究対象単元

	単元名	取扱時間	主な表現	使用する評価シート
1	アルファベットを見つけよう	4	What is this? It is a _____. Do you find _____? Yes, I do. No, I don't.	振り返りカード
2	誕生日はいつですか	4	When is your birthday? My birthday is _____.	Can-Doシート

※語彙については、割愛する。

(5) 評価方法

妙高市教育委員会で作成している「外国語活動振り返りカード」(以下、振り返りカード)と自主制作したCan-do評価の形式ののった振り返りシート(Can-Doシート)を用いた児童の自己評価から、意識の変容や学習の定着を見る。

① 振り返りカードについて(資料1)

妙高市では、2009年から、外国語活動の充実のために外国語活動コーディネーター制度を採用し、外国人コーディネーター監修の元、年35時間の外国語活動を実践している。振り返りカードは、国立教育政策研究所が出した3観点に基づき、外国語活動コーディネーターが作成したもので、妙高市のほぼ全ての小学校で使用されている。

3観点の自己評価の他に、「相手の目を見て、聞くことができましたか。」「相手の目を見て話すことができましたか。」というコミュニケーションスキルについての評価を書き込む欄がある。

② Can-Doシートについて(資料2)

Can-Doシートとは、長沼(2009)が、外国語教育の分野で近年用いられているCan-Do Statements(以下CDS)を用いてモジュール型シラバスを構築し、学習者の実態やニーズに合わせて適切なモジュール選択を行い、CDSに基づいた能力評価を組み入れることで、学習者の自律的学習を促すことが可能になる、と提唱しているものである。

本実践では、他教科と同じように3段階評価をするための要素として捉えた。CDSでは、ステージ3をその時間の到達目標とし、ステージ3を満足できることを目標として学習を行う。そこで、本実践では、ステージ3をB評価とし、ステージ1、2を達成するにとどまった場合はC評価、ステージ4まで到達した場合はA評価として評価の蓄積を行った。

本研究では、茂木(2012)が作成したCan-Do評価を基にして、単元に合わせてタスクを設け、自作した評価シートを使用した。なお、筆者が自作した当初は、段階を「グレード」と呼称していたが、現在は「ステージ」に変更している。

(6) 測定具

- ① 「Can-Do」シートを用いた評価の蓄積と分析
- ② 振り返りカードと「Can-Do」シートに関する自由記述
- ③ 児童への外国語活動の評価に対する意識調査：下記の3項目からなる5段階形式

資料1 振り返りカード

資料2 Can-Doシート(実践時)

資料3 Can-Doシート(現在)

(1：あてはまる 2：ややあてはまる 3：どちらでもない 4：ややあてはまらない 5：まったくあてはまらない)によるアンケート。

質問1：外国語活動の通知表の評価は、現在の形(所見式)がいいと思いますか。

質問2：外国語活動の通知表評価は、◎、○、△になってもよいと思いますか。

質問3：振り返りカードより、Can-Doシートの方がよいと思いますか。

- ④ 児童への外国語活動に対する意識調査：下記の4項目からなる5段階形式(1：あてはまる 2：ややあてはまる 3：どちらでもない 4：ややあてはまらない 5：まったくあてはまらない)によるアンケート。

質問1：外国語活動は好きですか。

質問2：英語を話せるようになりたいですか。

質問3：外国語活動で、少しでも英語を話せるようになったと思いますか。

質問4：外国語活動に積極的に参加していますか。

- (7) 分析方法：直接確率計算(母比率不等)、分散分析

4 研究の結果

(1) Can-Doシートを用いた評価について

3 (5) ②で述べた評価基準で自己評価の結果は図1に示すとおりである。

(N=29, A=40, B=30, C=20で計算。)

ここから、Can-Doシート導入当初より、自己評価が高くなっているのが分かる。実際の授業でも、それまでとは異なり、目標をもって活動する児童の様子が頻繁に見られるようになった。3回目からは、授業の初めにCan-Doシートを配布した。そのことで、児童にとって、本時ではどのような表現を使って、どのような活動をすれば良いのかが明確になり、より取り組みやすくなったようであった。

分析の結果から、児童の学習に対する評価が向上する傾向が見られた。設定したタスクが達成されていることから、授業者の設定したねらいが定着していると考えられる。

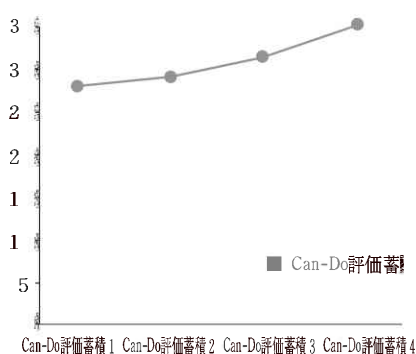
(2) 振り返りカードとCan-Doシートに関する自由記述

表2 振り返りカードとCan-Do評価に関する自由記述

	肯定的な捉え	中立的な捉え	否定的な捉え
振り返りカード	・書きやすかった	・どちらでもよい	・質問の意味が分からなくて、毎回同じ事は書き書いてしまう。(3名) ・同じ質問は、何を書こうか迷う。 ・急いで書かなければいけないから大変。 ・質問にどう答えて良いかわからない。(4名) ・質問が限定されている。(3名)
Can-Doシート	・書きやすい(8名) ・質問の意味が分かりやすい(3名) ・時間ごとに違う評価が書きやすい。(2名) ・質問が授業内容に合っている。 ・自分が思ったこと、感想を自由に書くことができる(3名) ・自分の感想が書いてよい ・○をつけるだけで楽 ・記号で表せる。 ・授業時間内に書けるのでよい。(2名)	・悪くはない	

自由記述をまとめた結果(表2)から、児童がCan-Do評価に対して好印象をもっていることが分かる。中でも、Can-Doシートへの肯定的な捉えとして、「書きやすい」という記述が目立った。「質問項目が授業に合っている」「時間ごとに違う評価が書きやすい」という記述もあり、振り返りカードのように3観点について質問されるよりも、具体的に自己評価できることが児童にとって有効であることが読み取れる。また、「自分が思ったこと、感想を自由に書くことができる」という記述も多かった。これは、今までの振り返りカードでは表現できなかった児童の学びを表現するのに、Can-Doシートが適合していたと推測される。

図1 評価の推移



「○をつけるだけで楽」「記号で表せる」という記述は少なかったが、口頭で児童に意見を求めると「それは当然」という旨の発言が多かった。また、「時間内に書けるのでよい」という記述もあり、振り返りカードと比較して、Can-Doシートは児童への負担感が少なく、児童にとって良い印象があることが明らかになった。

(3) 児童への外国語活動の評価に対する意識調査

表3 Can-Do評価の平均値 (M) ・標準偏差 (SD) と直接確率計算結果

	肯定	その他	<i>p</i>	比較
1 外国語の評価は所見式がよい	12	17	.51 ns	肯定 \equiv その他
2 外国語の評価は3段階がよい	12	17	.51 ns	肯定 \equiv その他
3 振り返りカードより、Can-Doシートがよい	27	2	.00**	肯定>その他
4 Can-Do評価	88	10	.00**	肯定>その他

** $p < .01$

外国語の評価についての意識調査は、表3のとおりである。ここから、所見式と3段階式はほぼ有意差がないことが分かった。さらに、現在の所見式に児童が一定の満足をしている現状に加え、「3段階評価で△がついたら嫌だ」という児童の意識が、記述から見られた。「◎、○、△の方が、評価がはっきり分かるからよい」という意見もあったが、多数ではなかった。

自己評価シートについては、自由記述でも見られた傾向だが、Can-Doシートが肯定的に捉えられていることが分かった。

(4) 児童への外国語活動に対する意識調査

表4 外国語活動に対する意識調査の分散分析結果

項目内容	児童 (N=29)				<i>F</i>	<i>p</i>
	事前		事後			
	M	SD	M	SD		
1 外国語活動は好きですか。	2.55	1.07	2.17	1.02	4.71	*
2 英語を話せるようになりたいですか。	2.28	0.94	1.59	0.67	23.38	**
3 外国語活動で、少しでも英語を話せるようになったと思いますか。	1.93	0.94	1.55	0.77	9.11	**
4 外国語活動に積極的に参加していますか。	2.52	0.93	1.90	0.88	24.39	**

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

Can-Doシートを実施する事前と事後でアンケートを行い、分散分析を行った結果は、表4に示すとおりである。どの項目についても、事後の方が有意意識が高まっている。

以上の結果は、Can-Doシートを用いて活動したことで、児童が外国語活動についての自信をもち、意欲的に取り組んだことが一因となっていると考えられる。

5 考察

(1) 振り返りカードについて

振り返りカードは、「外国語への慣れ親しみ」「コミュニケーションへの関心、意欲」「言語や文化に対する気付き」の3観点記述式である。授業の振り返りとして書くことが多く、授業者が評価するために使用する他、ポートフォリオとしての役割を果たしている場面もある。

常に3観点で評価し続けているため、指導要録への記入の際、評価者にとって分かりやすい評価要素になる。そのために、例えばただ「楽しかった」という記述ではなく、何を感じ、何を学び、何に気付いたのかを具体的に記述するための指導が必要である。また、毎時間、十分に振り返らせるためには、少なくとも5分の時間を確保することが必要となる。

そのため、児童の記述は2極化が見られる。意欲的に学習に参加していた児童は、本時のねらいが何で、中心となる表現、単語は何で、活動の中で身につけたものが何なのかを自己判断することができる。そのため、記述は具体的で、評価要素としても大きな意味をもつ。(資料4)

学んだことを比較的自由に記述できることに対し、Can-Doシートはアクティビティを通してタスクを達成できたかどうかを主な評価の対象となる。

表6 振り返りカードとCan-Doシートの比較

比較項目	振り返りカード	Can-Doシート
児童の評価	記述と4段階評価	5段階評価と記述
評価項目	3観点	タスクに対する
指導要録記入への反映度	一致（ただし、児童が記入していない場合がある）	毎時間蓄積する必要あり
指導所見への反映度	あり（ただし、児童が記入していない場合がある）	あり
3段階評価への反映度	なし	あり
記入に必要な時間	5分程度	1～2分
授業構成への反映度	なし	あり
教師の負担	なし	新規であれば毎時間作成する負担あり
児童の取り組む様子	記入欄が授業構成と一致しておらず、負担感あり	積極的、意欲的

(4) 所見式か、3段階評価か

本実践を通して、Can-Do評価を蓄積することで、3段階評価につなげることができることがわかった。しかし、児童アンケートの結果からは、すべての児童が必ずしもその評価を歓迎していないことが示された。山形県英語教育推進会議（2006）は「受験英語という実態から英語嫌いを作っているが、小学校に導入されれば英語嫌いを作ってしまうのではないか。この点で中学校の前倒し的な英語はよくない」と言っているが、このことが児童の中に顕在化している傾向が見て取れる。小学校の段階ではやはり「コミュニケーションを重視し、外国語の音声や表現に慣れ親しませる」（高橋，2008）ことが重要であり、それは、外国語活動に週1時間しか取り組んでいない児童の安心も保証しているのではないかと推測する。

6 成果と課題

本実践を通して、Can-Do評価を活用して、評価の蓄積は可能であることがわかった。Can-Do評価のシートは、児童にとっても記述しやすく、授業者にとっても授業のねらいを明確化できる、有効なツールであることもわかった。さらに、外国語活動で3段階評価されることには、児童が安心して取り組むことができる助けにはならないことも分かってきた。

今後は、Can-Do評価の項目を各単元に配置し、実際に指導要録に反映できる3段階評価が可能かどうかを目的として研究を進めたい。また、シラバスを構成し、より評価しやすい活動、単元配列に構成し直すことも課題としたい。児童にとってより充実し、より学びの多い学習になるために、ねらいと評価を一体化させることのできる外国語活動を目指していきたい。

7 引用・参考文献

- 伊東治己. 『アウトプット重視の英語授業』. 教育出版, 2008年
- 小寺茂明, 吉田春世編. 『英語教育の基礎知識—教科教育法の理論と実践』. 大修館書店, 2005年
- 影浦攻, 町川和子. 『小学校新英語の到達目標と指導のプロセス』. 明治図書, 2008年
- 高橋美由紀編著. 『これからの小学校英語教育の構想』. アプリコット出版, 2008年
- 田中正道監修. 『これからの英語学力評価のあり方』. 教育出版, 2005年
- 長沼君主. 『Can-Do評価—学習タスクに基づくモジュール型シラバス構築の試み』. 東京外国語大学論集第79号, 2009年 pp.87-106
- 茂木淳子. 『教育実践研究第22集「外国語活動におけるチャレンジタイム導入の効果」』. 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2012年 pp.233-236
- 茂木淳子. 『Hello, my friend! What would you like?』. 上越教育大学附属小学校平成24年度研究大会第5学年2組外国語活動活動案, 2012年.
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. 東洋館出版社, 2008年.
- 山形県英語教育推進会議 「第2回山形県英語教育推進会議意見概要」. 2006年,
<http://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700013/englishconference/opinion2.pdf> 2012年9月22日検索.